

ビバハウス便り No118 「ビバ農業実践塾」3年目のスタートを切る
2017年5月3日 青少年自立支援センター ビバハウス
責任者 安達 俊子

例年のように1年中でビバハウスが一番豪華に見える季節になった。ビバハウスの周り一面をびっしりと黄金の輝きでレンギョが飾ってくれている。もともとは中古プレハブのビバハウスも、この季節だけは、他のどの建物にも負けないほどのすばらしい景観を呈している。黄色ばかりでは変化がないとばかりに、かつて講演を依頼されたお礼にと頂いたチューリップも、頑張っってひと株に14個の真っ赤な花を咲かせている。

春の訪れと共に、3年目を迎えたモンガク農場の共同事業・農業実践塾の準備も着々と進んでいる。かつて共同事業者の長谷川豊先生が指導していたモンゴルからの研修生の驚異的パワーで立ち上げてもらったビニールハウスも今回はビバの力だけでビニールを張り終わり、坪内指導員の巧みな指導で、土起こしも完了した。本来は粘土質の土壌も長谷川先生から頂いた特別の改良剤のお陰で、手にとって触った人が驚くほどのぱさぱさとした土質に変わっている。

ビバハウス便り No116号でご紹介したとおり、現在ビバハウスと『風のがっこう』との農業と福祉の連携は全国的にも注目されているので、先週小樽で今後どのような展開が可能なのか、じっくりと検討を重ねていきたいと関係者間で確認のための特別の会合を済ませた。

モンガク農場の農業が進むと同時にメンバーそれぞれにも動きが出てきている。ビバハウスに入所して7年が経つY君は入所当初、人との関わりに悩み、ビバに来て、理解あるリサイクルショップで6年もの間たびたび休むことはあったが、雨の日も、雪の日も一生懸命働いた。去年そこを退職し、本人も新たなステップとして冬にはビバハウスと提携しているワーカーズコープの生活就労サポートセンター後志のご紹介でJRの除雪の仕事をし、春からは、余市町内の農園で農業のアルバイトを始めた。体力的には大変そうだが、7年前の本人に比べ、かなり成長しているのを感じている。今後もこのままの状態を保っていけば、ビバハウスを卒業も近いのではと期待している。

また、北星余市高校の卒業生で、3年前からビバに入所しているM君は町内の文化財施設管理人の仕事をしていて、今年で3年目を迎える。初めの頃は本人の悩みの一つである、気分が落ち込みやすいということが原因で休むこともあったのだが、本人が自分自身としっかり向き合い、自分を信じてがんばって1年、2年、3年と着実に成長し、毎日自転車で30分かけて働きに出ている。

今年は学芸員の資格を取る目標と、五月にビバハウスを卒業し、ビバハウスが運営している余市町内のステップアップハウスに移り生活をするという話を聞いている。

この何年もの間に関わってきたメンバーがこのように元気になり、そして次の目標に向かっていくその輝く姿を見て、本人たちが持っている大きな可能性を改めて感じさせてくれている。